

研究ノート

茶会記の姿 — 藪内流伝授式など —

耕三寺 華蓮

今回翻刻する茶会記は、前回「矢野・耕三寺2018」と同様に未整理の茶会記のまとめりから三点を翻刻する。一つ目は文政十一年六月十八日藪内家において三名に伝授を行ったというものであり、二つ目はその三日後の会である。三つ目は西本願寺での茶会である。なお茶会記が催された年次等については注記に記した。

茶会記は、先の論説「2018 矢野・耕三寺」に続き、茶会4、5、6と連番する。 「茶会4」

茶会4では、伝授式における道具組がわかる。

(本文)

茶会5には、藪内家伝来の茶道具に関して、詳細な注記がされており、貴重である。 文政十一年六月十八日

注1

茶会6には、後に藪内家に移築された、緝熙堂(元「墨竹の間」、須

多田紹及

注2

弥蔵や、飛雲閣の「八景の間」における飾り付けも記載されている。

川瀬紹悦

翻刻にあたっては、本字体と認められるものはそのままとした。

右三人江藪内紹智方傳受

注3

床 劍仲畫像 竹心讚

香爐 唐物唐金三足

真臺子 初代遠坂

釜風爐 七五三ノ手 初代九兵衛作

水指 唐金タキ桶(抱)

杓立 唐金桃シリ(尻)

蓋置 火舎ホヤ

右三品 義政公御物

茶器 黒棗

盛阿弥作

劍仲皆伝之節利休盛阿弥へ被申付候所

□袋 雲月廣東

義政御物

盆 初代遠坂写

茶杓 孫手写 紹智写

義政公御物

茶巾臺 比老齋写

茶碗 建盞 銀フクリン(覆輪)

香合

天目臺 唐物

炭斗

建水 唐金

尤唐物

灰器

「茶会5」

(本文)

六月二十一日朝

於燕庵□燕

寺村紹賀

撰州有馬□

武田儀右門

多田紹及

川瀬紹悦

若州家士

鹿野齊三

懸物 汲江 横大字 雪舟横物

釜 天明 小カタ付(肩衝) ハシキハタ

風爐 中平形 当時了全作

香合 唐物青貝 少庵ヨリ真翁へ

所□

炭斗 卜組エフコ(餌番) 当紹智好

灰入 宗品

花入 竹置筒 紹智

注 4

注 5

花 芭蕉ノ一葉

芭蕉水仙椿三伝傳之一也

水指

空中作

廣口耳付

木地蓋青竹ハシキ

茶器 秀吉公御銘 八重桜 藤四郎作

本来信長公御物也本能寺乱ニ紛失ニ及

秀吉公其後□々御吟味ノ砌劍仲南都ニテ

見出利休ニ見世候所即刻同伴シテ登城

秀吉公へ入御覽候所無相違所ト御意ニテ

御銘ヲ被下候由其御席ニ幽齋侯被候候

袋 電廣東

其席ニテ

秀吉公方相伝

(日野) ヒノカン東 其席ニテ幽齋侯方被下

伊東廣東 其席ニテ利休ヨリ贈

挽入 黒真塗

朱塗ニテ御銘アリ

幽齋侯筆

袋 (印伝) インデン 幽齋侯方被下

箱 蓋表 八重桜ト 寂如上人筆

蓋裏 寸法書付 劍仲筆

盆 (彫) ホリ物アリ

モト信長公ノ御物ナラ柴ノ御盆ナリ

注6

秀吉公御物御所持之砌利休御命ヲ承リ右

ナラシハハカシケタル物故唐物皆朱御盆ト

御取替申スモトノ御盆ハ利休被下候其

御盆ヲ劍仲へ取合可燃トテ□□候趣也

右二品トモ外箱 喫茶壺庵廳下書

文如花押

茶碗 井戸 真翁箱書付

茶杓 桑木 利休作

筒ニ 利休茶杓孫手ト申サレ候

此道を孫ひまこまで伝ふへし

手にとても心ゆるすな 劍仲

右ハ劍仲皆伝之節相用候もの

竹心書付

外箱 (曲) 竹輪 マケ建水

薄茶器 小棗 藝阿弥

替茶碗 比老齋作

會席

岡崎味噌

交趾 汁 小芋

向 干アンコ 干ワラヒホサキ

花カツヲ

二杯酢 飯

菓子椀 コクシヨウ

鯉青切

午房サ、カキ

岩茸

吸物 □干水せん寺

小梅干

取肴 川海老ニツケ

新生姜

片口 呉州 サツマノ紅貝 香物

フロシ酢

菓子 クツモチ

取菓子 虎屋白玉

松坂松風

茶 初祝 上林道安

承り候ま、書付候□ナリ

〔茶会6〕

(本文)

極月十一日申刻 西本願寺

掛軸 夢想^(窓)国師一行物

釜 大阿弥陀堂与次郎作

茶入 瀬戸 楽□

袋丹地中牡丹

銘遠山 比老斎書付

茶碗 粉引

銘慶雲 澤庵和尚書付

茶杓 不住斎共筒

銘わひさする

水指 故遠坂作

真手桶

香合 染付蓋物

花生 利休作

式重切無銘

花 庭とこ

寒さく

炭斗 手瓢

灰器 宗品

蓋置 竹挽切

水達 唐津

茶請 赤みそ

南京茶わん 汁 白小豆

向□子 山名たけ

四方焼豆腐 飯

煮物 角半平 焼物 鯛塩焼

注7

注9

注8

□菓

西湖之間

注 13

吸物
つる(鶴)

煮拔玉子

掛軸

唐画

取肴 木葉阿内

江夏少僊

注 14

かせい壺

釜

道仁作

(菓子)
くわし

若草まんちう

棚花

銀釣香爐

からたけ

珊瑚染之紐

茶初白

須弥蔵

注 15

墨竹之間

注 10

掛物

義政公竹懷紙

注 11

掛物

不住斎

釜

与次郎作廣口

釜

千鳥画賛

棚

先之御門主好

注 12

□

紅梅棚

水指

のんこう作

赤四方

注記

茶器

朱棗 雁蒔絵

注1 文政十一年六月十八日 武田儀右衛門が相伝を受けたのは文政十二年六月とされており(井上秀二(撰津の藪内流茶道 武田儀右衛門と茶室「燕庵」

茶わん

志野筒

唐津

一九九七年)、年次が齟齬する。

空中

注2 武田儀右衛門 紹翁。撰津の有馬郡結場村に住む富商であった。文政十二(一八二九)年六月に竹翁より相伝を受けたとされる(注1)。天保二

茶杓

有楽齋共筒

香合

蛤 菊置上

花生

青磁

花 梅椿

(一八三二)年頃、燕庵写しを建立。燕庵は相伝を受けた者のみ、写すことが許される。家元の燕庵が焼失などにより無くなったときに、一番古い燕庵写しが家元に寄付されることとなっているため、元治元(一八六四)年七月に

起きた蛤御門の変により藪内家の家屋が全焼した際、武田儀右衛門の持つ燕庵写しを移築した。

注3 藪内紹智より伝免 七代桂隠齋竹翁紹智（一七七四～一八四六）。皆伝伝授の儀式は真台子天目点にて行われる。

注4 寺村紹賀 助右衛門。寛延二（一七四九）年～天保六（一八三五）年。京都の糸問屋。蕪村門下十哲でもあった。六代の比老齋竹陰紹智に師事。竹翁より皆伝をもらう。

注5 香合 唐物青貝 少庵ヨリ真翁 千少庵から二代月心軒真翁紹智に贈られた青貝香合。宝尺文（図1）。

注6 茶器 秀吉公御物 八重桜 剣仲が奈良で見出した古瀬戸肩衝茶入。（図2、3）秀吉が奈良にちなみ、古歌の「いにしへの奈良の都の八重桜」から銘をつけた。挽家は秀吉が初代盛阿弥に作らせ、細川幽齋が「八重桜」を朱漆書している。内箱の表には西本願寺十四代の寂如上人が「や重さ久羅」を記し、蓋裏には竹心が寸法を記している。茶人盆として、利休より豊公御物であった檜柴茶入に添えられていた唐物彫物盆が贈られた。替えの盆として、唐物若狭盆が添えられている。仕覆は、秀吉より稲妻漢東、幽齋より伊東間道、利休より日野間道が好みとして贈られている。本会記では、幽齋より日野間道、利休より伊東間道が贈られていることになっているが、これは誤りと思われる。

本項の記載を含め、細川幽齋を「幽齋侯」と記載する方針と思われるが、この三文字目は「侯」に見える。但し、混乱が生じるので翻刻では「侯」と翻字した。

注7 極月十一日申刻 西本願寺 この茶会記を含む綴は、冒頭に「文政五年」とあり、その最後に本茶会が記される。したがって本茶会も文政五年と思われる。

注8 大阿弥陀堂与次郎作 千少庵から利休の遺物として、二代真翁のもとにきた三種の釜の一つが著名である（図4）。この本願寺の会で使われたのがそれであるかどうか定かでないが、参考として図を記す。

注9 遠山 藪内家の塗師。

注10 墨竹の間 西本願寺（本願寺派）の第十七世法如上人（一七〇七～一七八九）あるいは第十八世文如上人（一七四四～一七九九）の居間であったと伝わる。吉村孝敬（一七六六～一八三六）筆の竹が描かれているので「墨竹の間」といわれていた。蛤御門の変後、明治になって藪内家に移築される際に、茶室としての機能を加味され、書院座敷の趣を残しつつ草庵風に改築されたとされる。藪内家に移築後、緝熙堂と名付けられた。

注11 掛物 義政公竹懷紙 大谷家（本派本願寺）第一回蔵品完立目録の「義政公懷紙 詠竹不改色」（図5）に相当するか。

注12 先之御門主 この会記が文政五年であったなら当時の御門主は、第十九世本如上人（一七七八～一八二七）。先の御門主は、文如上人となり、紅梅棚は、文如好みとなる。

注13 西湖の間 西本願寺において、西湖の瀟湘八景を描いた部屋としては、飛雲閣の初層の「八景の間」が該当する。

注14 江夏少僊 呉偉「一四五九～一五〇八」中国、明代中期浙派の代表的画家。字は士英、のち次翁、号に魯夫、小仙（小僊）がある。湖北省武昌に生まれ、南京に移住、成化年間（一四六五～八七）画院に入ったが、憲宗の死後追放され、一四九九年（弘治12）画院に復帰し（画状元図書）印を賜った。

注15 須弥藏 西本願寺（本願寺派）の第十四世寂如上人（一六五一～一七二五）が藪内家五代不住齋竹心と共に建てられた茶室。蛤御門の変後、明治になって藪内家に移築された。



図4 大阿弥陀堂釜



図1 唐物青貝香合

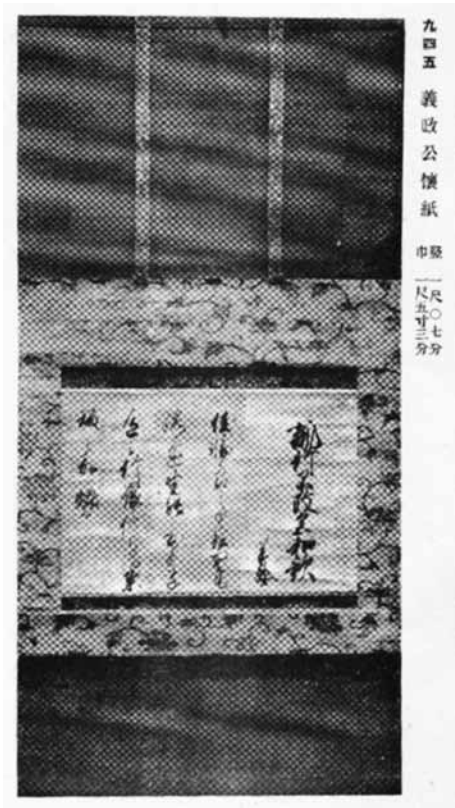


図5 足利義正懐紙

九四五 義政公懐紙 巾巻 一尺〇七分
五寸三分

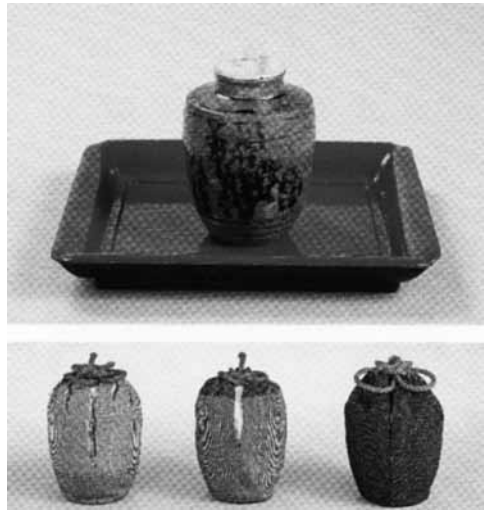


図2 八重桜肩衝 唐物若狭盆 仕覆



図3 八重桜肩衝 唐物盆 挽家

参考文献

- 〔2018〕矢野・耕三寺「茶会記の姿―藪内流 藪内剣仲二百回忌―」『文化情報学』13巻 1・2合併号 二〇二二―二〇二一頁 二〇一八年三月
- 井上秀二「撰津の藪内流茶道 武田儀右衛門と茶室「燕庵」」『竹風 四三号』四一―四九頁 一九九七年

図版出典

- 図1、2 藪内紹智監修『藪内家の茶道』古儀茶道藪内流竹風会 二〇〇八
- 図3、4 NHK『趣味どきっ！茶の湯 藪内家 茶の湯五〇〇年の歴史を味わう 二〇一八』
- 図5 『大谷家（本派本願寺）第一回藏品売立目録』